

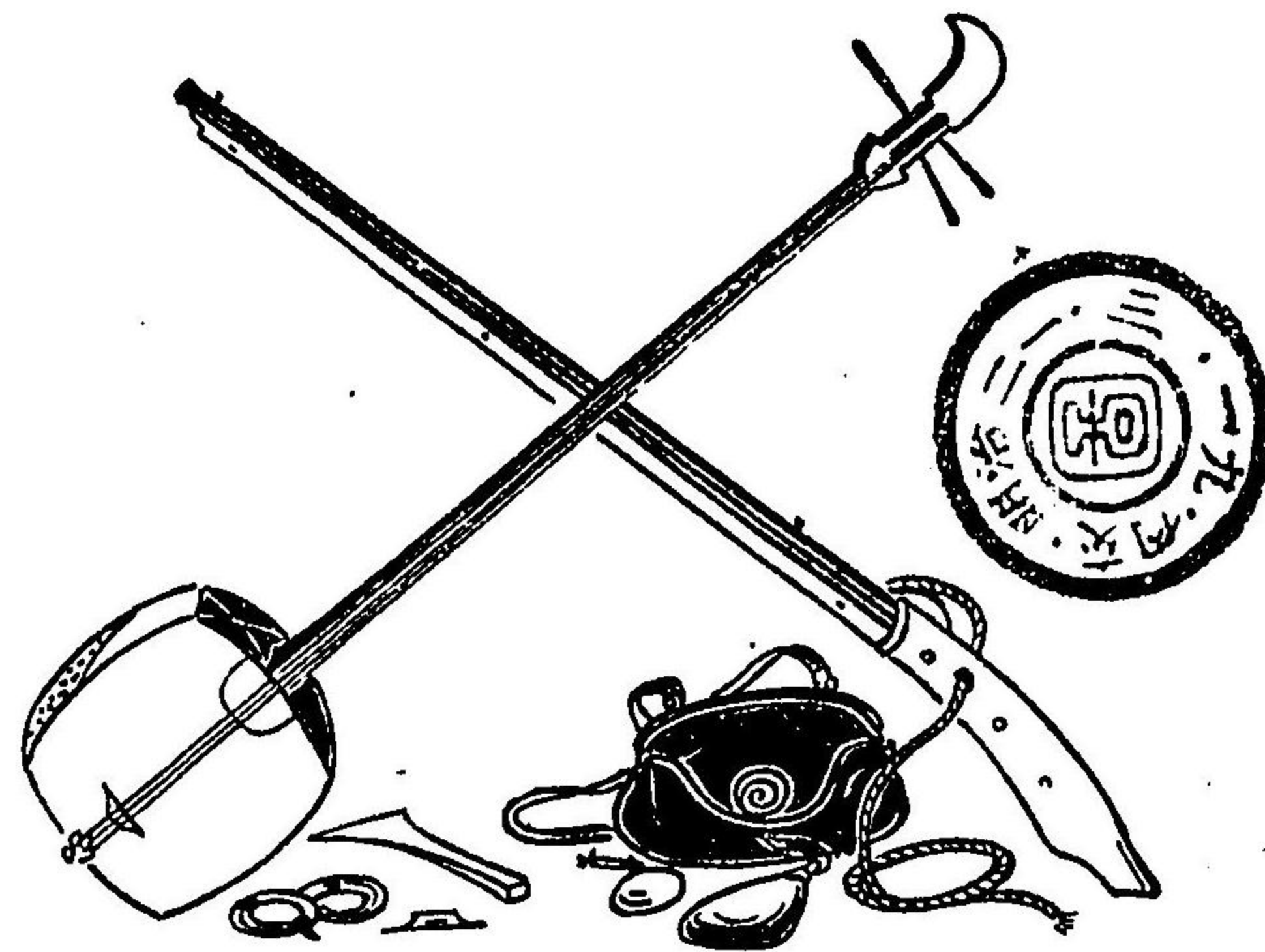
No 9205

24739

著 點 奕 奕 奕 奕
點 奕 奕 奕 奕

兌 發 堂 港 金

京 東



序

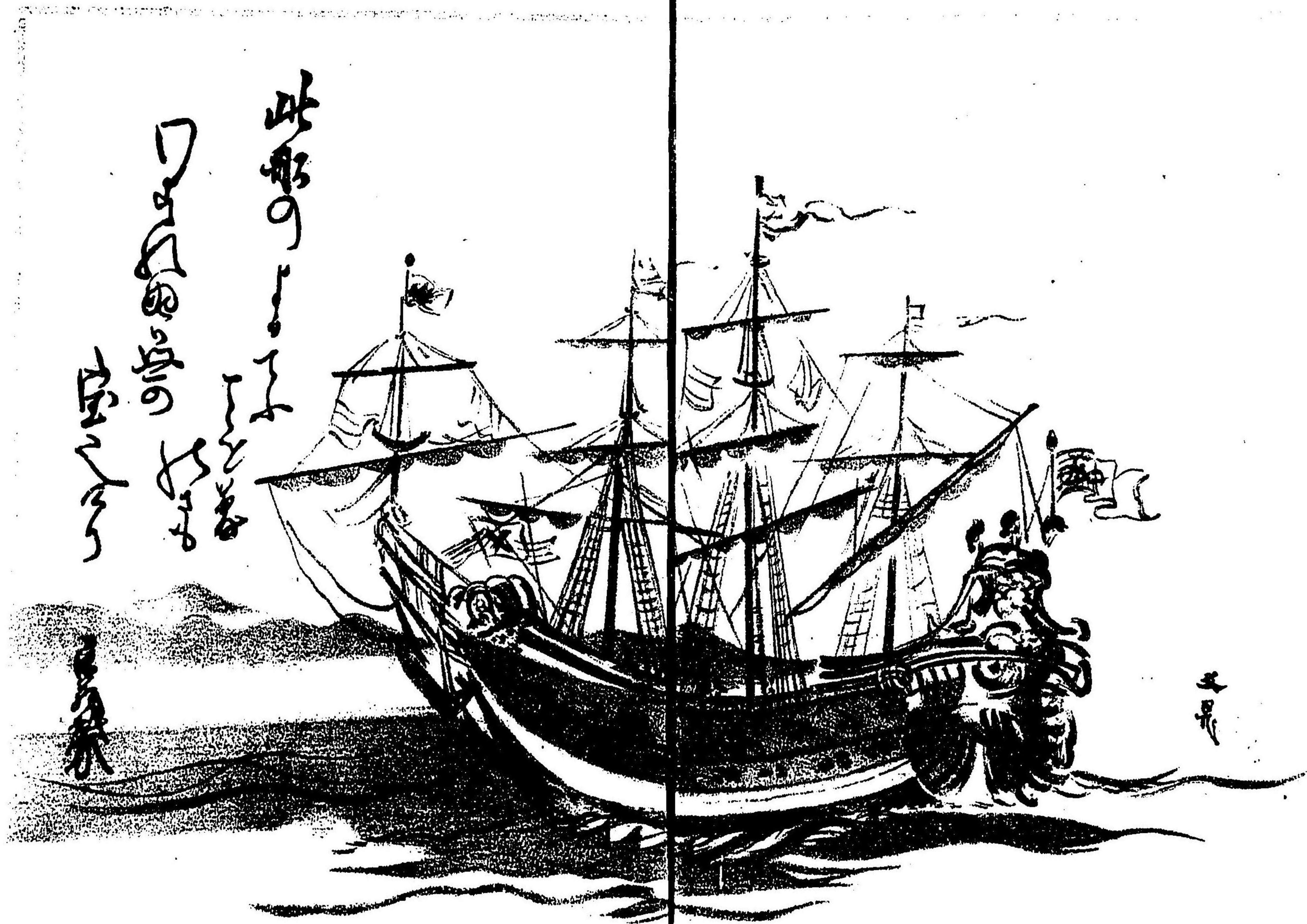
争亂極るときは治り。治世極るときは亂る。
天地自然の運數をいかよとも爲しかたし。
豆腐は大きく饅頭は小にして。あまねく世
界の珍味に飽き。狸にひとしく腹鼓うちて。
楽しい初午もほど近き。稻荷横町の横道へ。
化さるゝのは人の欲。かういさほひを好ま
るゝ。一番頭に小僧まで。其氣よなる海の深
浴衣。そまり易きは人心。論語よみの理屈も

をかしく。金財布より面の皮。鉄面九尾と出
かけても。ほつたて尻の落つかぬをいかに
せん。聲あきよ聞き形あきにあらはる。此小
冊の玄妙不思議。京の關の締めくゝり。萬と
歳由るかぬ御代を去とほきて筆を納む。

けふの日も命のうちにも暮にけり
翌日をも聞ん入相の鐘

如月のはじめ拙き筆をとりて

順 風 齋 誌



長崎の船
大船の船
船の船

舟

蘇陽云歳晩匆
 忙テ情況ナ假
 急テ道ヲ説キ
 來ル起テ非凡
 竹者五雨個の
 商賈は男しで
 是れ何人なる
 や想ふに一は
 京師の關白某
 公に擬し一は
 幕府の林大學
 頭となしたる
 ものならん

殘燈一點

操軒隱士戲著

京屋關藏江戸屋林八の問答
 雪は鶴毛に似て飛んで散亂し、人は鶴裳を着て立て
 徘徊す都も鄙もをこなへて、人足しげく行く年の廿
 日も三日の月思案の胸もきつくりどつまる鐘
 の師走空吉田屋ならで或る茶屋に、さし向ひたる二
 人の男色氣か金氣かしらねども
 京屋關藏「コレ林八手めへわからねへ事ばかり言て居
 ちや濟ねへせ第一はるく雪の中を節季師走登つ
 た甲斐もねいじやねいか馬鹿くしい

蘇陽云時勢已
ニ急迫ニシテ
事體又容易ナ
ラス而ルニ事
ヲ一介儒生ニ
托シテ偷安姑
息ヲ事トス何
等ノ失體ゾ何
等ノ怠慢ゾ然
レモ是レ豈獨
リ江戸屋閉店
前ノ支配人等
ノミニ限ラン
ヤ噫

竹香云是れ所
謂負んだ子よ
り抱いた兒と
云ふ場合なり
然れども本末
緩急の別は問
はずして知る
へし急なるも
のを捨置て唯
末事のみに着
眼す小刀細工
は短視政治家
の常なるかな
又云流石江戸
ッ子の俠氣あ
り唯上水で産
湯を遣ひし日
みならず毎
御茶の水を脱
んて出動せし
人に耻ぢさる
の言なり但て

江戸屋林八「そりや御前さん至極御尤でございませが子
此間中からわつちの知つて居やせ丈の事はあら
ざれいたとき出してしまつたんでございすものい
くら未だわからねいと被仰ても此上わつちが了簡
もへちまも御坐やせんマア全體今度の一件にや吾
儕が出る幕じや御せいせんけれども番頭役が申や
すにや容易ならねい譯では有るけれども左ればと
いつて此節季師走江戸の用事も例よりや余計ある
しどうも一人でも今手を抜いたや行れねい又春ハ
春の事で眞まど治らねい時にや如何ともするから
マア暮から春へかけちや手めへやア商賣のひまな

事なり是非往て呉れ親方も手代なんぞも左様云ふ
し又今度の事が若し手めへばかりで浪風なしに治
まりがつおて見た日にや夫をく何處も彼所も
やんやと云ふもの何しろ當時の所じや亞墨利加の
一件より此いきさつが目の上の疣だ夫に就ちや兎
なり角なり手前一人でやつてせいのけりや加増は
をろか大名にも取持てやる首尾能くいけは悪くも
ねい仕事だから是非往て呉れろと云て頼みやせか
ら又私ちも頼まれて見りや五分も引かねい氣象て
御せいすし何を言ふにも番頭役のこれ程に云ひや
すのを私ちやいやで御せいせと言ふわけにもいき

の俠氣ありて
今頃漸く顔出
しせしは最も
怪むへし

蘇陽云辭氣激
厲以テ肉食者
ノ膽ヲ冷スニ
足ル唯林八果
シテ實ニ此膽
勇アリシヤ否
チ怪ムノミ

竹香云など
手前味増で法
螺を吹き立て
も幸ににして
に番人なして
子九泉に在て
之を聞き玉は
はるくや今ま
はるくや今ま
彌兒を氣取り
しもの亦此の如

やせずサ併しそこでわつちが申やすにや是非往と
被仰るわけなら往もしましやふが御前様方へ對し
てはちと不躰だとかふり付けたとか申わけでも有
りましやふがわつちも彌く、あちらへ往く日にや
事ど時宜によつては是が御暇乞ひで皺腹を切つて
京都の土になるまいとも申されやせんから半分は
遺言だと思召して下せいましただが併しどうも被仰
るおどの内にわつちや少し耳のくすぐつてい文句
が有りやすマア斯申しちやお臍が茶を沸ととかき
ん玉が火を吹くとかおつしやるかもしれやせんが
外の事は悉皆御尤にも致しやしよふが加増を遣る

の大名に取持つのと云ふ一條はなんと抜て御もら
い申たふごせいすわい何も今度のいきさつは丑年
あの方欲得づくでわつちも肩を入た譯じやごせい
せん事は申さずとも御存じの通りのおと斯言つち
やちつと押しか重ていかもしれやせんが憚りなが
ら私つも孔子様の灰吹をあける事におおちや唐土
はしらすマア六十余店じや二タア下らぬい心持で
人も立物にして呉やすし又其の私ちならぬそ今度
も是非往て呉れど被仰るじやごせいせんお夫に面
白笑止敷もねいやれ加増だの大名だのと金づく半
分なんぞでおつふ御持せなすつちやどうもなまじ

蘇陽云豈唯町
人百姓ノ密夫
羅ノミナラン
英國議院ノ間
ニ於テモ亦然
リ羅伯瓦爾薄
云ク all those
men have the
re price. (是
等ノ人皆其價
値アリト國
會議員中ノ反
對黨ニ千磅又
ハ二千磅ノ賄
賂ヲ贈リテ其
發言ヲ購買セ
シト少カラス
而フシテ此弊
風漸ク明治ノ

昭代ニモ行ハ
レテ未ダ路ニ
於テ何カ有ラ
ンヤ
竹香云町内出
店ノ申込は是
れ驚天動地の
大事件なり古
來未曾有の大
問題なり處士
之か爲めに横
議し朝廷に横
爲めに震動し
覇府之か爲し
に傾覆し而し
て王政之か爲
めに来物換は
爾來物換はり
たること千態
万状星移りた
ることをその
二十回、その
間改正條約の

なま中二の足を踏む様な心持で第一癩にも障りや
と假令被仰る事ア御尤にしろ子分子方から親方も
今度ア欲得づくで登るとか何とかいはれて御覽な
せい商賣ののれんに障りやと全體御前さん方はわ
るい御料簡でなんぞと云ふと町人百姓の密夫騷き
を見るやうに世の中を兎角金づくで丸くやらかじ
てあわい目痛いめはすめい表向じや恥もかくめい
と云ふぞつあん御腹が抜ないもんだから今度の一
けんも矢張りソリヤと云ふと金づくが先に立やと
はうあで毛唐人共も日本の番頭衆始め此わけだか
らどんな無理を云ひ懸けても大筒はをろか玉屋の

流星ほどの音も出さあつちやねいと最う見通しの
法印さんで御覽なせいあげ句のはてにや町内へ出
店迄出さぬなんぞと言渡ほうでい云ひ出さした
ちやございせんか其一件で以てあちらできつい御
立腹で最う矢も楯もたまらなく氣を揉んで入らッ
シヤる處へ往てしがくをつけると被仰るわつちを
矢つ張り金づくで欺めようとはあんまり樂屋のし
れた狂言ちやございせんか第一其の光る餌さへ
御見せなさりや嬉しがつて懸る私ちだと御前様方
に御見立に預りやしたはあんまり有り難もござい
せんぜ夫ともどふせ今度の事アきてうめんじい

發議あり全權
大使の回覽は
りしより後香
ヒツソリと
もなく唯民間
の論客が暗に
に鐵砲の煙に
卷かされて計り
氣を揉む約り
なりし終に廿
會議も終に仲
九回にして夫
入りとなり如
一の町内店如
何ある可きや
を呼ぶ可らば
鳴亦久しいも
のかなか

蘇陽云病人
ノ時待ハ是レ
及女借亡ノ
ナリ此患者
テ四肢厥冷
息奄と殆ト
一タヒ死ニ
シタリシカ
チ國手ノ神
ヲ服シ朝ニ
驅テ健全ノ
トナリタリ
レトシ肉體
ノ慾ヲ退フ
テ安ヲ知ラ
タルハ疾ヲ
盲ニ入リテ
タナリ終ニ
トス可ラサ
救至ラシキ
茲ニ至ラシ
茲ニ至ラシ

わけじやございせんからと何處迄も金づくでやら
かろふと思召なら寧其方へ氣てんのきねた者をお
やりなまつちやどうでございそと一ばんぶつかけ
て見やしたら番頭役も手代役も閉口で眞顔になつ
てネろいつア一番あやまつた何にしる手前がそふ
いつて居て呉れちや夜が明かねい拜むから往て吳
ろニアどうも困るちやございせんかなんと關藏さ
んわつちが申やす事もまんざら無理でもございそ
めへが子
關アハくく「ういつア皆も閉口したらう夫でわから
ねいなアこら程のいきさつに節季で候師走で候と

云て一人も手はぬかれねいたア何の事たろう氣の
長いも事と時宜によりけりだ春迄延まても宜あど
なら毎年三月は京からも下る事だから其時談合し
ても濟むわけだけれども今度の事ア病人でいやア
最う時待といふ代物だ其の時待の病人を打捨つて
置いてちよいと似た風つ引も同様な節季一通りの
でたくよんでんでゐ舞をして居ると云ふ事が何處の
國にあるものか夫だから一日も早くと京都の親方
もせき込み切つてござるも尤よ又我等も實に今度
の一けんばかりア考ればかんげ程取越し苦勞の
やうではあるが寐ても起ても居たよまれねい様だ

ノ熱病ニ罹ル
 朝ニシテ溘焉
 永逝スヘシ可
 畏可戒
 竹香云江戸屋
 の主人は眞に
 家臺骨の一件
 迄には氣附か
 ざりしならん
 斯る場合には
 近頃機敏なる
 政治家もト
 御氣が附か
 れんかつた事
 あれば當時に
 於ては御尤ど
 も云ふて可な
 らん
 蘇陽云京屋ノ
 返事云々ノ説
 ハ獨リ酷ニ失
 スルノミナラ
 ス又慣例ニ暗

ア夫をうふとも思はねいて銘々の鼻つ先の鉢拂ひ
 ばかりして居てまかり違やア家臺骨をぶつたをさ
 れると云ふ事にや氣の付かねいのかハ馬鹿く
 しいマアよくつもて見さつしあいつらが江戸の親
 方へ十月目見の一けんたつても京の親方からは宜
 どもわりいと返事もしねい内に目見丈けは阿虜
 の法だとか世界中の風だとか云つて濟せて仕舞サ
 いやはや其時にや親方も僕輩もあきれて物がいわ
 れなかつたツケしかし二人りや三人の事だと云ふ
 し濟で仕舞た事ならどぶせるものだ今更如何様い
 つた處か六日の菖蒲十日の菊だまよ此上の處

十

キモノト謂フ
 ハノ一件ノ如キ
 ハ當時初メテ
 之ヲ執行セシ
 代ニ於テモ先
 屋ノ指令ヲ取
 タスニ度々取
 計ハタルナ
 レハ當時ニ限
 リテ急ニ非難
 スル此ノ謂ハ
 ナシ此ノ一議
 江戸屋ノ番頭
 手代ヨリモツ
 ト降リタル右
 筆向山甚太夫
 ト云ハル人曾
 テ之ヲ主張セ
 シトアリシト
 聞ク眞ニ千ト
 ノ卓見ナリト
 云フハシ

又何とか法のかきやうもあるふと親方とも毎日々
 々相談最中へ以て来て又町内へ見世を出していと
 言がどうだろふと言てよこした者だからびつくり
 仰天其時の親方の腹立ちと云ふものはろれはく
 どんなだつたと思ふ髪は逆に立つ眼は血ばしるじ
 やきばつて江戸の方を白眼しつやたけんまかア替
 丞相の天上した時やあんな物だつたらふと思ふ位
 サしかも其時や岡崎屋も出て居たつけがいつかな
 鬼本多の後胤でも蜻蛉切どころか筋斗をじて思は
 ず四五間下つたつけ夫から親方のけんまくが恐ろ
 しいと云つて居て濟むわけでもねいからおいらつ

十一

蘇陽云王赫斯
怒ノ形狀如シ
テ際ニ當リテ
是月目見町内
十月店ノ要件ヲ
出理スルハ難
ニ難事ノハ難
事ナルヘシ夫
ノ櫻田ニ踏レ
タル番頭ノ如
キハ學識ノ歴
兼備ノ偉器ナ
レハコソ内ハ
京屋ノ旨ニ忤
フモ外ハ阿虜
ノ歎心ヲ失ハ
ズ遂ニ能ク今
日アルコトヲ
タリ其ノ功績
ハ決シテ湮没
ス可ラス

竹香云當時京
屋の内幕穿ち
得て妙なり是
迄氣早を以て
誇りたる江戸
ッ子も此際江
於てと京屋の
番頭に一本參
られたる双方
の位置顛倒せ
りと云ふへし
江戸屋の閉店
分興と京屋の
中興開業とは
日に運命をこ
の間に定めたり
蘇陽云治齊
レ公ノ代ハ是
昌ノ時ニ大繁
恬ノ極ノ文
ナリ今日ノ事
開明ノ張本ハ

ちが寄てたかつてだましたりすかしたりしてい
やらやつと氣は落つけた物の親方がいはしやるに
や此鹽梅じや最う迎も手めへ達が筆の先なんぞで
埒の明くあつちやねいからなんでも番頭の中を一
入り直に登せろといつてやれと言はつしやるサさ
れはおいらも是非うふなくちやなるめへと云ふ相
談から其理屈も委しく書てマア何しろ早く一人り
登れと言つてやつたわけヨ夫をヤレ酢さのこんじ
やくたのと云つて手前一人よあをといふものはマ
ア全体京の親方を丸で踏付けにした仕うちといふ
ものぞ能く考ひて見ねい我輩が此やせ身上でも節

季は節季のやうに種々でんでのしがくもありサ又
親方の用だと言ても正月が来るに就ちや又江戸々
ア違つて奇妙きでれつな神棚せりの用はある實
に氣か氣じやねいけれどもさればといつて一日も
打捨ては置れねい一件なりまたどつちと言やア正
月早々からてんやわんやの御たくを聞くよりアど
ふせ節季の騒ぎつねで何れもかも年内よあら方は
濟して又春は春で正月だとかなんだとかいふわけ
て以てちつたアゆつくり一杯づゝも温まつてか
アの顔でも見て居ていと云ふ相談でせり込んだ處
が此返りになんのかのといふ内今年も最ふ七日ほ

遠ク之ヨリ起
リテ漸ク進モ
セリト云フモ
妨ケナシ物盛
必衰、月滿必
缺、一興、一廢
勢ハ古今ノ常
ニシテ復タ如
何トモスルヲ
能ハス

又云白川屋曾
テ齊公ノ世ニ
仕テ幕政ヲ執
ルニ當リ先ツ
開院宮尊號宣
下ノ朝議ヲ論
破シ以テ一橋
民部卿ヲ大御
所ト崇メテ御
ノ説ヲ杜絶セ
ンヲ務メ死セ
テ決シテ石清水
八幡宮ヘ一篇
ノ願書ヲ上ツ

リヤ其要旨
ニ云ク輕大
名器ヲ空クシ
テ上ツルヲ帝
室ノ瓊瑤ハ中
院政ノ弊ヲ除
世已ニ實證ア
リテ保平ノ證
繼遠カラス政
令ニ途ニ出テ
、臣民一從ニ
感ヒ遂ニ未代
ノ禍トナルハ
シ且ツ武家ニ
於テ若シ此例
ニ倣フ親藩ノ
家門ヲ舉テ父
位ニ備フ時
ハ宗屬ノ破禮
カ爲メニ破レ
ノ要府ノ政令
ノ要失ヒ天起

かねいが此一けんて以て正月ばれの冠や履の塗替
なら一ツい、付やしねいせ馬鹿く、しい成程江戸
も崩れは崩れたノ、治公や齊公の代迄は中々余ツ
ぼとまじめな物で、臘くせい事だつけが、纒の内、斯
又誰も彼も揃て女酒出して来たといふものは、マア
どふ云うものだらう、實にどうも解せぬいせ
林「イヤ最う被仰る處は逸々御尤で御聞申て居やす
私ちせへ汗が出やを位てございすがさればそゝで
ございすて御存の通り今のから三代先の親方とい
ふ者は有智人なり腹も大き腕前はありやを、し時
節はよしといふ處へ以つて来て又其頃の番頭衆の

中じや日本中はをろか唐士天竺までも鳴り渡つて
三つ子でも泣きを止たと言ふほどあわがつた彼の
御めへさん方にや少し御耳障りがあるうが京の中
山やさんどけんくわをしやした白川屋も居りサ夫
に續いて手代衆の中にも奥州生れの赤玉泉やその
外遠國の出店く、にもマア此節の様なぼんくらア
一人りもありませせ又わつちらの商賣仲ケ間にも
白川屋が見立て引ぱり出むやむた彦助に彌助に龍
助ヨ此三人なざアよつぽど商賣にや美々ちいもの
子其上にもきつかつたなア長崎の見世に居やした
松圖ヨ、マア此人なざア此節の人情で申やすとい

在リト云フニ
 確シテ主義
 營ノ公會ニ
 山正親兩卿
 ト對論シ侃々
 之言誇ク之
 之能ク公武
 未開ニ禍亂ヲ
 未シカ眞ニ是
 リシカ眞ニ是
 忠誠日月ヲ
 貫キ卓見千古
 貴照スノ名相
 ト云フヘシ
 竹香云この三
 助カ湯屋の番
 何カ湯屋の番
 頭ノ氣味を鼻
 屈の氣味を鼻
 ひたり尤もこ
 の番頭さんも
 本店の番頭さん
 と同じく番頭さん

故格の御儀式
 にも足も出ぬ
 未なりし幸始
 に出る世に
 其後ト至りて
 堆裏に埋頭し
 て經世の奇策
 を建つるに至
 らず矢張三助
 は三助なりと
 の名を遺せり
 豈千古の遺憾
 ならずや
 縣陽云本店ハ
 是レ中央政府
 ニシテ大黒柱
 ハ内閣首相ナ
 リ武斷者ナ
 徳川政府モ政
 器ニ能クモ政
 定スレバ動か

馬鹿者だとか氣違いだとか申やしよふが摩利支天
 の黒焼で産湯をつかつて不動様のつけ焼は虫おせ
 いに呑で居たといふ人でもござしやふが實に強氣
 な事におおちや鬼共と取つ組むといふ人さネ如斯
 いふ鹽梅しきに腕揃へてございよから六十余店の
 内にやれた山も少しは有りやしたろふがマア嘘に
 もぜいたくにも腕めへを磨く顔でなけりや通らね
 い世界でございすから其時分には今度の様な事も
 松前や長崎ぢやちつとやそつとの事はありもした
 そふでげいすか何がさてお前さん此通りマア第一
 の本店ががんにしよふでどんな地震がゆるふか雷か

落よふがちつとも大黒柱は動かねいことござい
 すから遠國出店出店の手やいもたどひこわくつて
 も本店の前へ對してゐわいのゐの字もいはれねい
 景氣で肥豊なんぞもレサノットとかクサカツタと
 かいふ奴等を天から突返して仕舞たといふ様なも
 のでマア何が始ても火の手はあがるめへちやござ
 いせんか夫から殿下文化文政と段々時代か替つて
 來やした處が親方も腕前はあるといふ物の最ふそ
 ろく老込みて來やしたそゐで番頭撥始め白川屋
 仕込の手あいはちど風が替つて來てからくりの様
 に御目にとまれは先様は御かはりくどなるど親

蘇陽云當時生
 殺ノ權ハ固ヨ
 リ我ニ屬セサ
 リシト雖己レ
 ニ時機ニ誤レ
 又談判ヲ彼
 是ニ於テ力者
 レ常ニ能動者
 ニシテ我ノ長
 ク被動者ノ地
 位ヲ脱セサル
 ノ端ヲ開キタル
 リ時勢ノ變遷
 政府ノ交送ヲ
 ム我ノ情勢ヲ
 彼我ノ如シ國
 ニ及ヒテハ必
 ス此地位ヲ針
 倒スルノ針路
 ナス取ル可ク

今どなつちや中く、金づくや御愛度盡しの甘口ち
 やおつつかねいなんでもしらきてふめんの腕づく
 で浦賀の内ですつとやらねいけりや末始終
 むづかしいと云ふ事は三つ子でも知つて居やせけ
 れども結句親方や番頭衆は今によもやくで気が
 付ねいうして兎角むまく内ふでやつて濟もつもり
 ど見へやすがどふも六ヶしうございすヨ殺もも生
 かそも寅年の春乗込んで来た時にある事で今どな
 つちや殺すにも殺されずうならどいつて生かじ
 ておきやア我儘ほうだいをいつて詰る處ア皇國の
 家臺骨に障るといふ一けんてございそから先で言

やと事も先づ内々では御無理御尤よ受けて置いて夫
 でどふだと言へやすと御前様方始め三店の旦那や
 親類衆が此の通りやかましく被仰るじイヤハヤか
 とつた咄ぢや御坐いせんヨ斯言つちや何か私わらわが早
 くけいりてい紛らかしに色々江戸の店御しをする
 やうで御坐いすがなにちつとも左様ぢやございせ
 んまた御前様方への申譯がよしや濟すんで江戸へけい
 つたにもしろどうせ此一けんは始終私わらわが肩をぬい
 て仕舞ふといふわけにや参りやせんから何も一寸
 のかれも逃げ尻もする事ぢやございせんがマア早
 く申すと今の親方や番頭衆が丸つきり行届かぬば

蘇陽云當時ノ
大勢ヲ洞觀シ
テ善ク二三人
治家ノ人物ヲ
評スル所一々
肯歎ニ中ラヤ
ルハナシ

かりでもで坐いせんのサなせと申て見た日にや先
づこなんな騒きになるめへものでもねいと云ふ事
のちらほら見やたのしたの濱松屋が乗張つて
精勉おろからの事で此時にも水戸屋の隠居なざア
どんなに喧敷申したろふそれ通らねいてぶ
づ込んで仕舞はれ又濱松屋の跡役か福山屋ネきや
づらア丸でいくしなしの親玉で實ア今度のいきさ
づの開山と云ふものサ尤も今の佐倉屋も濱松屋と
は暫く一坐もしやした者で御坐いすが全體ふとあ
ろ子同様で京大坂も見た事アなと殊に未た其頃は
小僧で使先つかひで犬にけしかける時分なりまた根か結

構人と来て居やすから今である歸參御職でこそあ
れ實アなんの役にも立ねい人ヨそあが見込で三年
先に福山屋がちやんと唐子おとしの案山子に引つ
ぱり出して墨利加の掛りを脊負せてお先きに遣つ
て置たくらいなんでこせいすから其内に福山屋は
ぼろの出ねい内に死にサ實は跡に残つた番頭役も
今となつちや誠に迷惑なものでこせいそのサ夫に
就ても毎度江戸でも申やそが宜い時に死にやした
のは福山屋サ子一万兩の増給金はもれいサ虎の皮
の鞍覆に爪折傘打上げ腰綱代とまでやつ付やした
仕合な奴じやこせいせんか今の息子なざア知らね

蘇陽云敵國外
 患ノ長ルヘキ
 ハ内亂内訌ノ
 禍ニ十倍セリ
 一着事ヲ誤マ
 レハ國體汚辱
 セラレ國權地
 ニ墜チ國權皆
 奴隸ノ域ニ陷
 キルヘシ時ク
 古今ノ論ナク
 又治者被治者
 ノ別ナク吾人
 ガ一日モ念ル
 可ラサルモル
 ハ實ニ此關係
 是ナリ

二十六
 いものが見やすと丸で昔からの帝鑑ちやきくと
 ほか見へやしません尤も彼の一けん付ちや善て
 も悪るくつても初から目坪に取られて極心配はし
 やしたけれ共未だ、此夏までは何處も彼處もよ
 もやく、で如此云ふ事にまでならふと云ふよさか
 景氣でもございせんから同じ苦勞をするにも御前
 さん方に一本突き込れる事迄すべく言譯をしね
 いけりやならねいと云ふのとは大きに、に鹽梅
 しきか違ひやせわ子だがどうも先刻も申しやを通
 り此上私に石をお抱せなさるふが假令文責詩責で
 も實に最ふ白狀に及ふべきあと更に無してござい

二十七
 すぜ
 關「いかさまナ一段と三番叟からの咄を聞て見りや
 ア手ぬへの言ふ所もまんざらわからねへ筋でもね
 へけれどもしかし常不斷なんの事もねい時にやマ
 ア京都は京都江戸は江戸といふものでたとひ親方
 かどうらくをしようふか皆ながのろけよふが強心頼
 着もねいわけなり又それを言つてにせりやお互と
 云ものだから内とのもや、は、どうでもよしたけ
 れども今度のいきさつばかり、ア、是がこふじる日に
 や大變なわけ、江戸は勿論事によりやア、京の親方
 ま、居途立途に迷ふわけにもなる、と云ふもの、だ、か

竹香云公武隔絶東西分離の世に於て所謂公家衆の内幕に入て見ればイヤハヤと云ふべき有様と云ふべし當時斯る貧乏の間には長せし人数に成せし人数の外大抵與屈の繪の風あるのみならずこれに至らざる所なきに一家の内にて殆んど言ふに忍びざるの醜行もありしと聞けり

竹香云柔懦無氣力の公家衆は急に臨みては此の決心あり争奪世界に立ちて星羅萬邦と相手にし左邦を握りながら右手に私利私慾を營まんとして能く永く其位を得んや

ら。今度は親方も珍らしくやかましく言はしやるわけサ、それに我輩が困るとにやこふ言つちやちつと恥かしいわけだが常不斷ちつとやうつとの事があるつても何がさて此の通り不景氣な土地に居るおいらが事なり又上にこそ居れ江戸から見りや家臺骨も十分一ともいかねいからマアきたねい譯たが何ぞと云ふと一杯つゝも貰うて波風なく行て來たとの事を親方が口へおそ出さねいががんぐつて居るヨ、そ、あ、で、又、今、度、の、一、件、も、例、の、通、り、江、戸、か、ら、一、杯、つ、い、も、よ、お、す、物、だ、か、ら、京、の、親、方、の、言、ふ、通、り、の、禁、句、を、悉、皆、は、云、つ、て、遣、る、め、へ、か、と、云、ふ、疑、り、あ、あ、つ、て、ど、う、

も可笑はてなく、と思つて居やした矢先へ持て來て番頭は來ず手前が一人り來たと云ものだからいよく疑ひのうはぬりヨ誠仕惡ひといつちやねい夫れも例のやうにちつたア光るものでも貰つた譯なら今更仕方がねいとか何とか云ふ自許官で腹の虫も觀念をして居もしよふが實に今度の一件におおちや奇麗なものでうんな金は扱をき海苔一枚團扇一本でも貰れいやアしねいせ尤江戸からは矢つぱり例の格で持込んて來るけれども今度に限つちや繪紙一枚でも決して貰ふめへと云ふ初手から仲ケ間の言ひ合せだから先日中も度々突返してや

蘇陽云天變地
 異ヨリ火災戰
 亂ニ至ルマテ
 或ハ之ヲ定運
 定命ニ歸シ或
 ハ人事ノ感應
 スル所ト爲ス
 迷想陋見モ亦
 甚シ是レ所謂
 Predestination
 ノ説ニ類似ス
 ルモノニ曾
 テ泰西諸邦ニ
 モ行ハレタル
 所ナリ今ヤ人
 智愈々發達シ
 テ造化ノ境域
 ニ侵入シ百事
 唯 Free Will

ねい

林「イヤ最ふ何ともかとも御返事の申上げやうも
 せいせん一から十迄みんな御尤でございすのサ夫
 に今お咄しの京の親方がおめへさん方の今度の一
 けんでも矢つ張金づくが交るかど疑つて御出なせ
 いすど云ふわけじやア實に爰は御察し申やすイヤ
 不賤なから御互にどうのこふのと氣は揉やすけれ
 ども誰がしたでも彼がしたでもなし詰りはマア江
 戸の親方が内の運が傾むへて來たといふ譯でも
 せいじよふヨ能と跡を振りけいつて見やすとちつ
 とづいア前表とやらがあつた様でございすて些と

ニ據テ進歩ス
 ルカ故ニ人事
 ナテ盡シテ天命
 ナ待ツト云ハ
 シヨリハ寧ロ
 人智ヲ以テ天
 命ヲ制スト云
 フ場合ニモ到
 リタリ

竹香云餅は餅
 屋の喩もある
 に商賣柄であ
 りながら一昨
 年頃には氣か
 くと何と事
 ならずや借問
 文章經術士
 年來畢竟讀
 何書

石龍子や大橋左内の言草のやうではあり升がマア
 二百年來何の事もなく濟んで参りましたものが此
 二三十年の騒々しい事と申やす物ア先づ大坂の大
 鹽一件が舞臺開きの幕明きで夫から十六年の間に
 本店が一度、隱宅が二度で都合三度の丸焼サ續いて
 丑年亞墨利加の一件發端真最中に先の親方が薨御
 それから一年に二度の大地震又去年こちらの御焼
 けなすつたのも矢張一つの惡兆サとふも奇妙じや
 ございせんら慶長此かた此位よくねい事の跡から
 跡へつながつた事はございせんぜ爰いらの始りの
 處でちつと禪のしめ處でございしたろふし又私ち

蘇陽云天命
ノ變見ヨリ
勢ノ變動ヲ
テ天災ト想
シ手ヲ束ネ
如何トモス
能ハサルモ
亦極マシ愚
ハシ愚陋モ

蘇陽云宋末
山ノ役ニ於
腐儒ノ學動
固ヨリ道フ
足ラズ幕府
代之評者ヨ
之ヲ笑フニ
尚ホタルモ
ハタルモノ
ルヘシ然ル
今日ノ吾人
者ヲ見レハ
更ニ

ニ笑フニ堪
タル事多キ
如何セン

竹香云平素
事ノ日に於
は僅に素讀
南の看板を
けさの役尊
人の事と一
師主及一坊
主など一外
に社會以外
片附け置き
がら一引事
れは俄に引
出さずはあ
き使ふはあ
り情なき話
ら客の去學
士論客の割
わるきは古
東西皆然り

なんぞも早く気が付きや心付をしてい、商賣柄で、
ひせいもから何とか申のでひせいたろふが下愚
の智慧跡廻りでよふく、一昨年頃からはなと氣
がつきやしたくくらいなと今となつちや馬の進ま
さればなりなんぞと云つても追つ付く事ぢやなし
イヤハヤ天の爲せる災も半分自から爲せる災も半
分でどふも今となつちや仕方かひせいせずされ
ばといつて今ふりかゝつた火をぬくろ手で見居
られるものでもなしおんな事は皇國ばかりでもな
く幾等もある事で御前様達にや釋迦に説法孔子に
語道とやらで百も御承知てひせいしようがアノソ

ラ宋とやらへ夷狄が攻め込んで滅亡する時其時の儒
官だとか藥罐だとか名を何とか言つたけが常に
欲平天下者先治其國欲治其國者先齊其家なんぞと
やらかして宇宙間を丸呑にした様にしやべり散し
て居た奴がソリやと言時になつてはなんの役に立
つ所か何國にも居たゝまらないで船に乗つた平家
の八島壇の浦といふ身ふりてネ斯はならぬい筈だ
が最ふ災害並び至るといふ段になつちや善者あり
ど雖ども如何ともする事なし南無阿彌陀佛く、な
ぞと云て泣てばかり居やかつたと云つて宜笑ひも
のサ私ちも同商賣で見りや余所事に聞ちや居られ

其問答都て江
 戸辨にて記し
 たるは京屋の
 方に取れて少
 しく耳障りな
 なる氣味なき
 たる氣味なき
 にもあらざれど
 も文勢の流暢
 明快なるに賞
 りては却て著
 者之に引續き
 あり後篇の腹稿
 あり二人の對
 話をこゝに止
 めずして巧み
 に結局を告ぐ
 るの趣向あり
 し由なるが當
 時忌諱に觸れ
 んとを憚りて
 終に果さざり
 しと眞に遺憾
 と云ふべし

に懸つて見りや是迄私ちの知らぬい委しい事も御
 咄し申やす事になりやして存外早道な御ハなしが
 あるかもしれやせん色く考げいて見やしてもマ
 ア夫よりかアございせん私も是非どうして御
 貰ひ申さなくつちやどうも立行きか出来やせんが
 しゝしわかる手やいが來て呉れりやアいゝが

殘燈一點終

明治廿一年十二月八日版權免許
 明治廿一年三月十日印
 明治廿一年三月十二日出

定價十五錢

著者 故人久松操軒

東京府士族

久松義典

東京府飯田町四丁目
廿四番地

發行者

東京府平民

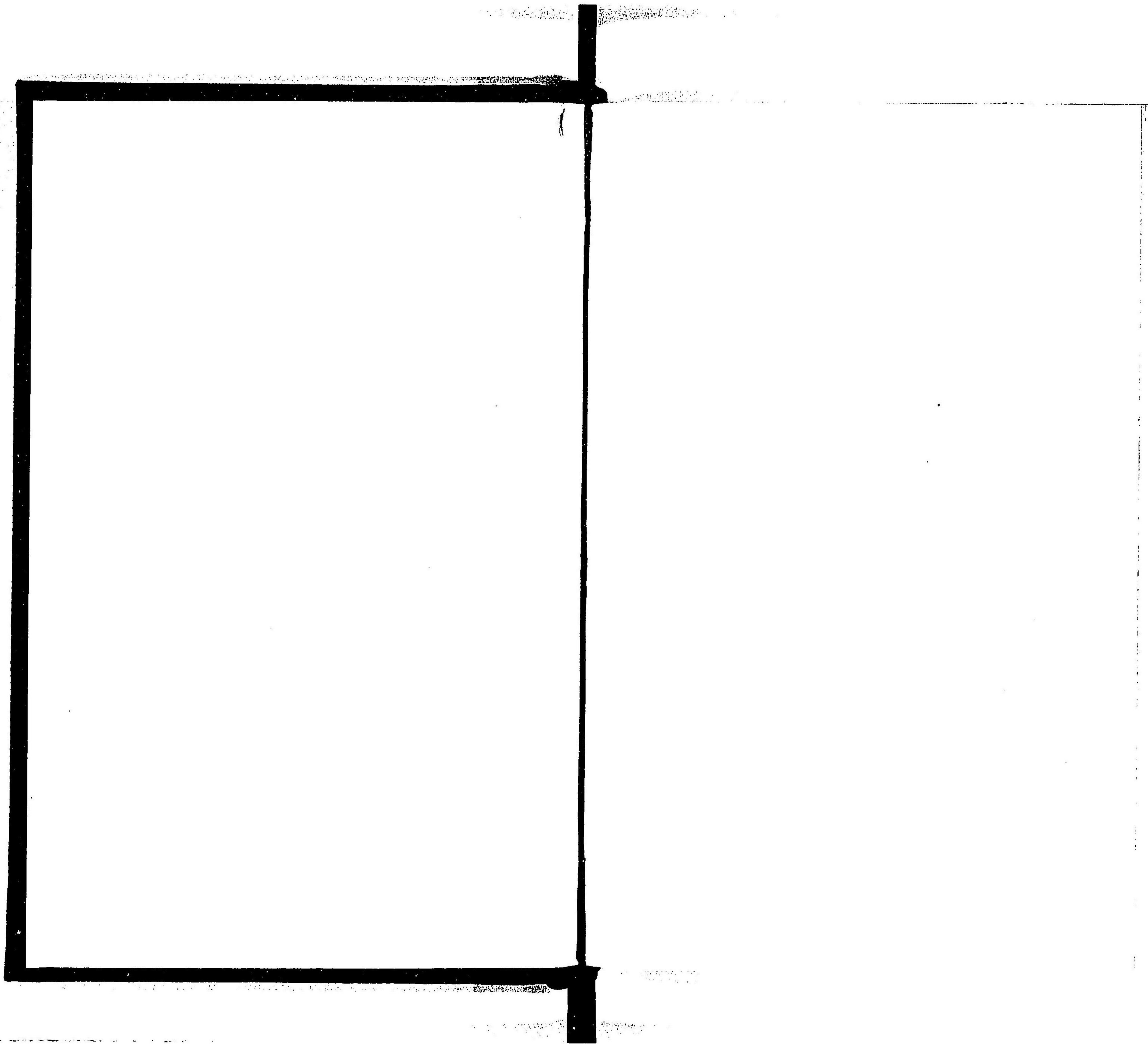
山竹次郎

東京府橋本區八宮町
十八番地

大坂北久寶寺町四丁目
金港堂 原亮三郎支店

賣 捌 岐仙 卓盛 金 港 堂

다
29



25
73

25
73

091733-000-3

25-73

残燈一点

久松操軒/著

M21

DBO-0207



25
73

廣
類
博
考

久松義典

明治十三年

